内田魯庵研究

――「硬文學」・「軟文學」論議を中心に――

三浦大輔

はじめに

明治・大正時代を代表する文学者であった内田魯庵（不知庵）は文学理論『文學一斑』（明治二十五年三月、博文館）の発表以後、活動の中心をそれまでの文芸批評から翻訳業に移行しつつあった。魯庵の翻訳は例えば『罪と罰』（小説）巻之一（明治二十五年十一月、内田老鶴圃）が明治二十五年の文学状況を回顧した無署名「文學界の概況」（明治二十六年一月五日『國民新聞』）において、「獨り十一月に出でたる不知庵の『罪と罰』とは、仝氏が尤も嗜好するドストイエフスキーの傑作を譯したるものにて、文學者仲間には評判高し」と総括されたように、概ね好意的に受けいれられた。

ところが翻訳が高い「評判」を得ていた最中、魯庵は突如として当代の小説と小説家を総体的に考察した評論「今日の小説及び小説家」（明治二十六年七月三日『國民之友』）を発表する。そこで本稿では本格的な批評から遠ざかっていた当時の魯庵に、全八頁の膨大な論説の執筆を促した背景を確認し、さらに「今日の小説及び小説家」で課題の一つに挙げられた「硬文學」・「軟文學」論議について整理することとする。

なお本稿は学位請求論文の第四章第一節の一部を抜粋し、修正を加えたものである。

一、「今日の小説及び小説家」執筆の背景

魯庵に「今日の小説及び小説家」の執筆を促したものは、森鷗外「無名氏に答ふる書」（明治二十六年五月二十五日『しがらみ草紙』）であったと推察される。「無名氏に答ふる書」とは『女學雑誌』から独立した文芸雑誌『文學界』（明治二十六年一月三十一日創刊）の創刊を祝した無名氏「文學界」（明治二十六年二月十三日『國民之友』）に応答した評論である。鷗外が問題としたのは評論「文學界」のなかの「頃來しがらみ草紙は單調にしてさまで目覺ましき事も見へずなりしが、早稻田文學は日に其講義録めきたる領地を減じ、文學時報に版圖を擴め、天晴れ日本文學の全局に其力を延べんず勢となりぬ」という箇所であった。没理想論争が収束に向かって一時の盛況が失せた『しがらみ草紙』批評欄に対する当てこすりに、鷗外は「そも〳〵柵草紙の評論は、嚴に審美の區域を守り居り候へば、世上に審美に關する事多きときは、其評論も亦多かるべく、少きときは少かるべきこと當然に候」と反駁する。即ち当代の「日刊新聞には、審美問題殆全く絶え、文學雑誌には、或は批評を止めたるがために審美問題減じ、或はその方嚮の實世界の事に傾きたるがために審美問題減じたる」状況を理由に、『しがらみ草紙』評論欄が「中絶」したと主張したのである。

留意すべきは「文學雑誌にて批評を止めたる」ところの「原因」を没理想論争の争点の一つともなった「所謂記實主義の勢力」に認めるとともに、「日刊新聞に審美問題殆全く絶えたる」ところの「原因」を「忍月、不知庵、抱一庵等のこの比此區域より出で去りたる」ことと指摘した点である。つまり鷗外は『しがらみ草紙』評論欄「中絶」の背景となった当代の「審美問題」減少の一因が、明治二十四年八月に内務省試補として官途に就いて以来、文学関連の活動が減少していた石橋忍月（明治二十五年十一月五日に辞職）、及び翻訳業に傾き文芸批評の「區域」から離れていた魯庵にあると指摘したのである。名指しを受け、先ず忍月が明治二十六年六月二日に創刊された総合雑誌『思想』を新たな活動の場として本格的に文芸批評を再開する。忍月が文芸批評を再開した理由は、職を辞して収入が途絶えたという事情もあろうが、「所謂硬文學、所謂軟文學」（明治二十六年七月二日『思想』）のなかで「無名氏に答ふる書」を引用している点に着目すると、鷗外の指摘に促された側面も見逃せない。

忍月は「所謂硬文學、所謂軟文學」の冒頭で

　此頃所謂硬文學者なるもの起り、文學に硬軟の區別を設け小説戯曲等を軟文學となし、史論若くは此に類似のものを硬文學となし、硬文學の流行するを以て文學進歩の兆となす。噫何ぞ夫れ無意識の甚だしき。ノンセンスも茲に至れば亦た医すべからざるなり。

と論じ、当時横行していた「硬文學」・「軟文學」なる区分を批判した。「今日の小説及び小説家」でも冒頭で当代の「唯雷同して輕浮なる讃賞若しくは詬刺を逞ふし以て自己の快を買ふものに過ぎざる」批評、とりわけ「硬文學」・「軟文學」なる区分への不満が公言されている。魯庵は「硬軟の區別」を「破天荒の新意見」と揶揄し、①「文學は事業なるを以て重ずべしといへども軟文學の如きは畢竟遊戯文字に過ぎず兒女の歡を買ふべきも士君子の讀むべきものにあらず」、②「是等の遊戯文字は輕浮淺膚なる思想にして他の史論家評論家が作と同日のものにあらず」、③「近日此軟文學なるもの衰へて硬文學の隆盛を來せしは文學進歩せし徴候なり」、④「軟文學の衰へしは自然の理數にして軟文學は到底永遠に殘るべきものにあらず」、⑤「軟文學は遊戯の作なれば社會に蠹毒を流すの外一の功なし」、⑥「此敗德を養成する軟文學の漸く減ぜんとするは社會の爲に賀すべし」という六つの「論斷」に疑問を呈する。整理すると「軟文學」即ち「小説戯曲詩歌等」を「卑賤陋猥」で「社會に蠹毒を流す」が如き「遊戯文字」と括り、「硬文學」即ち「史論傳紀評論の範圍に屬するもの」を「深邃幽奥」で「永遠に殘るべきもの」と括ること、また「軟文學」が衰退したと見做すこと、さらに「硬文學」の「隆盛」を受けて「文學進歩せし徴候」と捉えることを否定したことになる。

　二人が批判する「硬文學」・「軟文學」とは竹越三叉「文話数則」[1]（明治二十五年十月二十三日『國民新聞』日曜附録）で提示された評語であり、「硬文学家」とは「史論及び此類の文学家」を、「軟文学家」とは「小説若しくは之と類似の文学者」を指す。三叉は魯庵と同じく『國民新聞』創設の社員の一人であり、明治二十八年十二月に退社するまで『國民新聞』や『國民之友』などで評論家として活躍した人物である。「近日の文學」（明治二十三年五月十六日『國民新聞』）や「文學界の缺點」（明治二十四年八月六日『國民新聞』）などを確かめると、三叉の文学観は当代の「纖少」・「微細」・「浮華」・「卑汚」で「博大の觀念」・「雄壯の思想」がない文学を否定し、文学と「人民」との関係を重視する立場から社会や政治の動向を意識した創作を推奨するというものであったと解釈できる。

　このような文学観を有する三叉の見解に、美学的見地に立脚した価値判断を求める忍月や魯庵などの文学プロパーが反発することは自然であった。だが「硬文學」・「軟文學」とは、あくまで明治二十五年十月に提示された評言である。約九ヶ月後の明治二十六年七月に二人が一斉に批判し始めたことは唐突であり、理由は「無名氏に答ふる書」の主張にあろう。何故なら鷗外は『しがらみ草紙』評論欄「中絶」の背景の一つに挙げた「文學雜誌の方嚮、實世界の事に傾きたり」ことの顕著な例を「所謂史學の流行」と指摘し、

　史は實世界を離れざるものにて、其骨髄には毫も審美に關するところ候はず。史を修むるときに美辭を使はゞ、これは低級藝術として、審美の境に入るべしと雖、今世間にいふ史學問題は、斯様のところには存ぜず候。

という見解を示していたためである。「無名氏に答ふる書」によると「今世間にいふ史學問題」とは「低級藝術の美を説くもの」から「進みて史海なんどの議論に立ち入りたる」ものであるという。要するに「最早史といふ實世界を離れざるもの」であるが故に、「審美問題に委ぬる紙面減ずること」となったというのである。留意すべきは鷗外が「所謂史學の流行」に関し、「世の無識なるものが、此風潮を文學進歩の兆となし、それ見よ、小説、戯曲のやうなる軟文學衰へて、史論といふ硬文學こそ盛になりたれ、と囃し立てしこと」を批判し、

　藝術の文にも、フアウストの如く硬きあり、事實の文にも許多のへぼ史論の如く軟なるあることを知らず、衣に軟なる絹行はれたるが、一時行はれずなりたるとき、たま〳〵食に強飯はやり出したるを見て、それ見よ、軟貨の用衰へて、硬物の用こそ起りたれ、といふに似たる迷惑には、驚き入る外なく候。美文に目を注ぐ人少くなりて、實用文字に目を注ぐ人多くなるは、衣服に綺羅をかざる時代の次に、料理に奢を極むる世來るが如くにて、衣あれども食は廢せられず、食ありても衣は棄てられず候。かゝる烏許のしれものは、數千年前の希臘人の迷をくりかへして、詩人を手品つかひに比べて無用のものとし、史家を靴やに比べて有用のものとしかねまじく、可笑しさに堪へず候。

と論じた点である。鷗外は「藝術の文」即ち「軟文學」と「事實の文」即ち「硬文學」とが本質的に異なることを明確にし、当代の「実用文字」隆盛の「風潮」が「文學進歩の兆」ではないことを主張したのである。右引用箇所は「所謂硬文學、所謂軟文學」

のなかで「近來快絶の文學」と称揚され、「吾人（忍月＝引用者）が曾つて言はんと欲して、未た其機なくして今まで言はざる處を言ひしもの」と認められている箇所であり、また前述の「今日の小説及び小説家」のなかで呈せられた六つの「論斷」とも相通じている。時系列的に考えれば「硬文學」・「軟文學」なる区分への批判は鷗外の主張が契機であり、忍月と魯庵が批評を再開した背景に「無名氏に答ふる書」の存在が確認できよう。なお今日ではゆまに書房版『内田魯庵全集』などで評論「文學界」も含めた無名氏署名の諸評論が、魯庵の筆になるものと推定されている。仮に魯庵を評論「文學界」の執筆者と推定するならば、魯庵は鷗外の反駁に応じたとも解釈できる。

二、「硬文學」・「軟文學」論議の概略

ところで魯庵たち三者が批判した「硬文學」・「軟文學」なる区分は、当時民友社が中心となって盛んに推し進めていた史論・伝記の興隆という時勢の上に提示された。推進者の一人であった民友社社主徳富蘇峰は評論「文學者の新題目」（明治二十五年六月四日『國民新聞』）のなかで当代の文学が小説か漫筆か哲学めいた文に限定され、しかも「千篇一律」である点を批判し、原因を「題目」の行き詰まりと指摘した。そこで「新天地を開拓」するよう勧め、一つの具体案として歴史上の武将や政治家や文学者や経済家や偉人などを「文學上の好題目」とするよう提唱したのである。歴史上の人物を詠んだ漢詩を評価した蘇峰「詩中の人物論」（明治二十五年六月十二日『國民新聞』）などは持論の実践と見做せる。蘇峰の提唱は従来のいわゆる純文学偏向の文学観に対し、史論・伝記を主流とする新たな文学世界の構築を訴えたことになる。

蘇峰の提唱を受けて民友社では、例えば山路愛山が「歴史家としての新井白石」（明治二十五年八月七、十四日、九月四日『國民新聞』）を執筆し、以後も「山東京山」（明治二十五年十月三十日『國民新聞』）や「頼襄を論ず」（明治二十六年一月十三日『國民之友』新年附録）などを発表した。また『國民之友』では明治二十五年九月二十三日から新たに「史論」欄を設けている。当時の史論・伝記の勢いは「文學界の概況」のなかで「歴史」の項が第一に掲げられ、冒頭で「前年來の歴史熱は、此年（明治二十五年＝引用者）に至りて、大に騰上し、新聞、雑誌も、小説も、歴史的趣味を加へざれば評判好からざるに至れり」と記されていることに明らかである。文学プロパーとして小説や戯曲を一貫して推進してきた忍月も「二十六年」上半期の文學界」（明治二十六年八月十三日『國民新聞』）では「史論傳記」の項に「小説」の項の約三倍を割き、「史論傳記は實に文壇の過半を占領せり」と認めざるを得なかった。

また「文學者の新題目」では史論・伝記の推進と対峙する形で、「虚に馮り、空に架して、之（『小説の題目』・『詩歌の題目』＝引用者）を尋繹」することについても見直すよう求められていた。このような蘇峰の提起と関連しつつ、愛山は「頼襄を論ず」の冒頭で

文章即ち事業なり。文士筆を揮ふ猶英雄劍を揮ふが如し、共に空を擊つが爲めに非ず爲す所あるが爲也。萬の彈丸、千の劍芒、若し世を益せずんば空の空なるのみ、華麗の辭、美妙の文、幾百卷を遺して天地間に止るも、人生に相渉らずんば是も亦空の空なるのみ。文章は事業なるが故に崇むべし、吾人が頼襄を論ずる即ち渠の事業を論ずる也。

と論じる。要は「文章即ち事業なり」という見解のもと、「空を擊つが爲め」の「文章」即ち美文を否定したのである。愛山「明治文學史」（全七回、明治二十六年三月一日～五月七日『國民新聞』中絶）の説明によると「文章即ち事業なり」とは「文章は即ち思想の活動なるが故」であり、かつ「思想一たび活動すれば世に影響するが故」であるという。つまり愛山における「事業」とは「唯見るべき事功」ではなく、また「世と渉る」も「物質的の世に渉ること」ではなく、あくまで「精神界の事業」を意味するという。但し愛山は「頼襄を論ず」のなかで頼襄（頼山陽）が生きた時代を分析した際に、当時の儒学者の「弊害」を「抽象し又抽象し推拓し又推拓す到底一圈を循環するに過ぎず議論愈高くして愈人生に遠かる」点と指摘し、かつ当時の詩人の「弊害」を「究竟清風明月を歌ひ神仙隱逸を詠じ放浪自恣なるに過ぎず絶へて時代の感情を代表し、世道人心の爲めに歌ふものあるなし」点と指摘した上で「史學は實に當時に於ける思想世界の藥石なり」と評言し、「史學に非んば何ぞ之（当時の儒学者・詩人の『弊害』＝引用者）を濟ふに足らん」と論じていた。「文章即ち事業なり」という前提に従い、当時の思想界・文学界の「人生に相渉ら」ない実状を批判した箇所だが、儒学・詩文における「弊害」の救済を史学に求めたところに論の飛躍が窺えよう。前提通りに「人生に相渉ら」ない点が問題の根幹ならば、本来は儒学・詩文において「人生に相渉」ることを追求すべきにもかかわらず、愛山は儒学・詩文そのものを否定して史学という別ジャンルからの救済を訴えたのである。

このような論理の背景には「純文學」（明治二十六年五月三日『國民新聞』）に明ら

かな、愛山特有の文学に対する認識が存在した。「純文學」では先ず純文学の「意義」の曖昧さが指摘され、次いで

　因て思ふ人あれば思あり、思あれば言あり、言あれば文あり、文は即ち人の文字に彰はれたる者に過ぎざる也。夫れ言語に若し純言語と云ふものなきを知らば文學に又純文學なるものなきを解すべし。

という所見が窺える。愛山は「古人の文を曰ふ」ところに倣い「文は即ち人心の活動」とも評言しており、一般的な「文」と詩文や戯曲などのいわゆる純文学とを一括りにしていたと解釈できる。従って同じ「文」という括りで、本来ならば別ジャンルに属する史学から儒学・詩文の「弊害」を救済するという論理を構築し得たのであろう。しかも「純文學」では「自然の外に美なる者ありや」という所見のもと「我心の動くが如くに筆動くに至れば即ち文の能事此處に盡たるに非ずや」と論じられ、「文の文たる所以は正直に思想を顯はすに在る耳」ともある。故に愛山は

　人若し筆を落して此（「正直に思想を顯はす」境地＝引用者）に至れば即ち至文也、此外更に純文學なる者ありや。

と結論する。「正直に思想を顯はす」ことの一事のみを「文の能事」と捉える見解は、過度な文飾偏重の時勢を憂慮して作者の「精神」であるところの「風情」を重視した初期の魯庵批評とも、また「鬱勃言はんと欲する所」の「慷慨」を創作の根源とするよう求めた島田三郎の発言[2]とも相通じていよう。だが「純文學」が発表された明治二十六年は既に忍月が「想實論」（全九回、明治二十三年三月二十～三十日『江湖新聞』）のなかで「想實調和」を標榜し、また没理想論争が収束に向かい、魯庵も『文學一斑』のなかで「想像中の意匠」を唱えていた。愛山も「正直に思想を顯はす」ことと「詩想」を詩文として著すこととの差異に言及して然るべきであった。「古人の文を曰ふ」ところに倣っていた愛山には、魯庵が『文學一斑』「第一　總論」で紙幅を費やして整理したような現在、及び将来に相応しい文学の「意義」への意識を欠いたまま、昔ながらに文学＝文章と解釈して純文学批判を展開していた側面も窺える。

　結果として儒学・詩文が虚文・空文で史論・伝記が「事業」と見做されても仕方がない構図が生じ、「文章即ち事業なり」という見解はジャンル上の対立にまで及ぶこととなる。周知のように「頼襄を論ず」は人生相渉論争の発端となった評論であるが、人生相渉論争の主動者の一人であった北村透谷も「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（明治二十六年二月二十八日『文學界』）のなかで、「彼（愛山＝引用者）は『史論』と名くる鐵槌を以て撃碎すべき目的を廣めて、頻りに純文學の領地を襲はんとす」と把握している。ジャンル上の対立構図において、「硬文學」・「軟文學」という区分と人生相渉論争とが関連していたと把握できる。魯庵が「硬軟の區別」に関連し、①「文學は事業なるを以て重ずべしといへども軟文學の如きは畢竟遊戯文字に過ぎず兒女の歡を買ふべきも士君子の讀むべきものにあらず」という「論斷」を否定した所以である。

　だが愛山も総ての詩文を否定したわけではない。例えば「山東京山」では滝沢馬琴・柳亭種彦と比較しつつ、戯作者の山東京山（山東京伝の弟）を、また「『心中天の網嶋』を讀む」（明治二十六年五月二十五日『國民新聞』）では魯庵も『文學一斑』のなかで日本におけるドラマの好例として評価した近松門左衛門『心中天網島』（享保五年十二月六日、竹本座初演）を称揚している。但し「山東京山」では馬琴の「趣向をこしらへたる」点・「實際に有るまじく覺ゆる人物のみ多し」点・「當時の社會が如何なる有様なりしかを知るには毫も役に立たぬ」点・文章が「文學あるものにあらねば解し難き」点、及び種彦の「趣向に過ぎて受取れぬ」点・「人品高尚にして俗情にうとき」点・文章が「平民には縁遠き」点が批判され、京山の「（一）趣向の自然なること」・「（二）善く社會の實況を寫すこと」・「（三）其文字の平易なること」が評価されている。詳しく説明すると、京山の「趣向」は「實に淡泊」だが「原因」・「經過」・「終結」があり、しかも「巻中の人物」に「各々適當の役割」もある。故に「讀むに從つて快味自然に生ず」こととなり、馬琴や種彦と比較すれば「自然」に近いという。また馬琴や種彦の「主觀的」な「理想小説雲上小説」に対し、京山は「目前の實景」を描写し、「書中の人物」が「當時實際に活動せし人物」であるという。京山は文章も「平民の言葉を其儘に寫すもの」であり、しかも「其中自ら雅なる所」もあるというのである。

　不自然な「趣向」や過度な文飾、及び「主觀」に偏り〈想〉に流れることは文学プロパーも各々の評言で否定してきた弊害であるが、「當時の社會が如何なる有様なりしかを知るには毫も役に立たぬ」点や「人品高尚にして俗情にうとき」点・文章が「平民には縁遠き」点などを批判したところに愛山の特徴が見出せる。透谷が「人生に相渉るとは何の謂ぞ」のなかで

　天下の衆生をして悉く愛山生の如き史論家ならしめば、當時の社會を知るの要を重んじて、京山をも、西鶴をも、最上乗の作家として畏敬するなるべし。天下の衆生をして悉く愛山生の如き平民論者ならしめば、山東家の小説は凡ての他の小説を凌ぐことを得べきこと必せり。

と当てこすり、「然れども文學は事業を目的とせざるなり、文學は人生に相渉ること、京山の寫實主義ほどになるを必須とせざるなり」と指摘する所以である。

なお「史論家」的に「當時の社會を知るの要を重んじ」たという透谷の指摘は、「『心中天の網嶋』を讀む」にも適用し得る批判であった。愛山は「『心中天の網嶋』を讀む」の冒頭で「小説は或る意味に於て歴史也、否歴史よりも更に眞實なる事實を教ふる者也」という持論を掲げ、『心中天網島』の「趣意」を「情死」と分析して近松が「人をして死せしむるに足る者」であるところの「大なる勢力」という「人生の秘密（ミステリ）」を描いた点を認めるとともに、近松の「寫實家」としての側面にも言及している。「『心中天の網嶋』を讀む」によると、近松は「遊廓の光景」や「妓家の内情」、もしくは当時の市井の「宗教」を描写した「活きたる社會學」であるという。そこで愛山は近松によって「徂徠の書よりも白石の書よりも、多く當時の人情風俗を察するを得る」と評価し、「活きたる社會學」の内容を

彼れは人事の何者にも通ぜざるなし。彼れが風俗を寫すやのんこに髪結び野良らしひ男、伊達衆自慢の放蕩子。編笠に人目を忍んで遊廓に通ふ武士等躍然として紙上に出づ、彼れが經濟世界の事を寫すや、問屋貨幣、商人の行儀、仕切、拂ひ等當時の慣行歴々として筆端に顯はる。彼れは方言に通じ、「テキニカル、ターム」を知り之を使用すること専門家の如し。

と説明する。右引用箇所に従うかぎり、愛山は「風俗」・「經濟世界」・「方言」など表面的な要素と関連する具体的な知識の豊富さを認め、『心中天網島』を称揚したことになろう。一方で魯庵は『文學一斑』のなかで「我等が知見を貪るものハ人事及び人間の情勢にして、而して此科用書となり此標本となるものハ則ち『ドラマ』にあらざるか」と訴え、「千の心理書百の倫理書を推窮せむよりハ人性（ヒューマンナチュア）の寫眞たる『ドラマ』に接して果然心に得る處必ずや多からむ」と論じていた。要はドラマを「人性を研究する」ところの「材」と見做していたのである。

このように魯庵が「人性（ヒューマンナチュア）の寫眞」と評言してドラマにおける人間の運命や内面の描写を重視したことに対し、愛山は「活きたる社會學」と評言して「風俗」・「經濟世界」・「方言」などの知識が得られるか否かに着目した。愛山の『心中天網島』評は、構図としては小説において「日本の盛衰存亡は常に外より來るを知らしめ遠航貿易の務めざる可からざるを知らしめ海外の風土、人情、物産を知らしめ現世紀の兵器は理科學の所産なるを知らしめ理科學の貴むべきを知らしめ偉人傑士の風采を想望せしむる等」の「副産物」の獲得を求めた矢野龍溪の所見[3]と一致しよう。「文章即ち事業なり」の本意が「精神界の事業」と説明されつつも透谷が一貫して承服せず、人生相渉論争が物別れに終わった一因である。

なお「文學界の概況」には史論・伝記の隆盛に関し、

鷗外漁史が柵草紙に於て、低級術羈絆術として抑へたる史筆、不知庵主人が文學一斑に於て、文學界より斥けんとしたる史論、其史筆史論は社會より歡迎せられたり、二氏は盲目千人の世の中と言ふや否やを知らざれども、輿論には抗する能はず、天下の大勢には敵する能はず、憐れ泣寐入りの姿となりたり、

という当てこすりがある。確かに鷗外は「無名氏に答ふる書」のなかで「今世間にいふ史學問題」を「低級藝術の美を説くもの」と主張していた。だが主張はあくまで当代の「審美問題」を対象としており、「美辭」で著せばという条件をつけた上で、史論・伝記が「審美の境に入る」可能性を指摘したに過ぎない。当時の鷗外は没理想論争の立脚点でもあった「結象的理想派（コンクレエト）」のハルトマン美学に準じ、「類想（ガツツングスイデエ）」・「個想（インヂヰヴアアルイデエ）」・「小天地想（ミクロコスミスムス）」という「美の階級」に基づいて美術・芸術の価値判断を下していた。[4] 故に「審美問題」の一つと仮定するならば、原則として史論・伝記も〈想〉の領分において「階級」が決まることとなる。そこで本質的に「實世界を離れざるもの」で「其骨髄には毫も審美に關するところ」のない史学は「低級藝術」にしかならないと説明したに過ぎず、史論・伝記そのものを「抑へた」わけではなかった。繰り返すが、鷗外の本意は「藝術の文」即ち「軟文學」と「事實の文」即ち「硬文學」との相違を明確にし、当代の「実用文字」隆盛の「風潮」が「文學進歩の兆」ではないと主張する点に存在したと解釈すべきであろう。

一方の魯庵は『文學一斑』「第一　總論」のなかで、

從來の歴史若くハ傳紀なるもの、多くハ事及び人を主としてたゞ記述せしに止まるを以て、分明に詩の範圍内にありと雖とも、思ふに記述躰既に廢れて、事及び人を題目に取り分拆的批判を試みんとするの機運漸く迫れるなれバ、從來の叙事詩（エピック）に類せるハ兎に角、將に來らんとするの歴史及び傳紀ハ豈に詩の隷屬ならんや。

と綴っていた。つまり「分拆的批判」が主流になるであろう「機運」を論拠として、将来的に史論・伝記が「詩の範圍内」から遠ざかる可能性を示唆していたのである。また「第三　叙事詩（エピック）」では「時代小説」と「歴史」との差異を整理し、「歴史」を

もと歴史ハ事實の説明を主とするなれバ、隨筆家（タロニクラー）の如く唯精細に事實の顚末を記述するか、然らずんバ其原因結果及び性質を説明するか、或ハ一時代の中心點たる偉人の品性を分拆し、以て一に人性を明らかにし二に世の潮流に逆ふて自由意志を逞ふする人間の運命を窮むるをもて目的となす。

と解釈し、次いで「時代小説」を

然るに時代小説ハ全く是と反して歴史上の事實を題目と爲し、其本末及び關係並びに其燒點たる人物の行爲（アクション）と情性（キャラクター）を繪画の如く描出して當時の社會を眼前に活動せしむるを以て主旨となす。

と解釈していた。つまり「歴史」と「時代小説」とは同じく「歴史上の事實」を素材としつつも、前者は「外面」的・「表面」的な現象の分析から「人生の運命を攻究する」ことを主眼とし、後者は「事實の内面」に隠れた「實躰」、及び「因縁」までを導き、さらに「形像と爲して表現」することで読者に「悟得」させるというのである。

このように『文學一斑』における史論・伝記に関する記述を整理すれば、魯庵の意図が主旨や構造の対比を通し、詩と史論・伝記との相違を明確する点に存在していたことが見出せる。史論を「文學界より斥けんとしたる」ことに違いはないが、主眼は区別そのものにあったと判断でき、史論・伝記の価値を否定したとは見做せない。『文學一斑』の目的の一つは古今東西の文学論を近代的な視点で改めて精査し、当代、及び将来に相応しい文学の「意義」を導くことに存在したが、史論・伝記に関する記述も同様の目的の上になされたと解釈すべきであろう。従って「文學界の概況」が当てこするように、史論・伝記が「社會より歡迎せられた」としても「泣寐入り」することはなかったはずである。実際に魯庵は当時民友社が企画した〈十二文豪〉シリーズの号外として評伝『ジョンソン』（明治二十七年七月、民友社）を上梓しており、詩を推進することと区別して、史論・伝記の価値も認めていた。

故に「今日の小説及び小説家」でも史論・伝記そのもの、及び史論・伝記の隆盛そのものを批判した箇所はない。あくまで魯庵が問題としたことは「小説戯曲詩歌等」を「軟文學」と評言しつつ「卑賤陋猥」で「社會に蠹毒を流す」が如き「遊戯文字」と括り、一方で「史論傳紀評論の範圍に屬するもの」を「硬文學」と評言しつつ「深邃幽奥」で「永遠に殘るべきもの」と括り、その上しかも「軟文學」の衰退と「硬文學」の「隆盛」とを受けて「文學進歩せし徴候」と捉えた当代の「唯雷同して輕浮なる讃賞若しくは詬刺を逞ふし以て自己の快を買ふものに過ぎざる」批評であった。魯庵の問題意識は史論・伝記を「思想世界の藥石」と位置づけ、史論・伝記から詩における「弊害」の救済を訴えた愛山たち「硬文學」推進論者の根本的な批評原則に向けられていたと解釈できる。

三、当代の小説家への提言

さらに魯庵は「硬文學」推進論者の小説家批判にも言及する。「今日の小説及び小説家」によると、先ず当代の批評のなかには小説家の懶惰的・厭世的「言行」を批難する傾向が窺えるという。確かに蘇峰「文學社會の現状」（明治二十六年五月三日『國民之友』）や「思想の三潮流」（明治二十六年四月二十三日『國民之友』）、愛山「凡神的唯心的傾向に就て」（明治二十六年四月十六、十九日『國民新聞』）などで小説家の懶惰的・厭世的「言行」批難が見出せる。蘇峰や愛山の批評は人性相渉論争を背景に、透谷ら『文學界』系同人の超然的態度を否定しており、「言行」批難が「小説戯曲詩歌等」を擁護する側全体への批難まで意図しているかのようにも解釈できた。故に『文學一斑』において高尚で高潔な文学・文学者像の確立を目途の一つとした魯庵は「多數人を擯斥するが爲に累を精勵眞摯なる代表者に及ぼすは寛宏なる批判者の爲す處にあらず」と抵抗し、当代の小説家に懶惰的・厭世的「言行」が窺える事実と小説・小説家の本来の価値とを峻別して判断するよう訴えた。

もちろん魯庵も当代の小説家の多くを「遊戯三昧に陥り文學者の本分を忘れしもの」と捉え、「怠惰と贅澤なる二個の通有性の外は何物をも有せざる文學者の多きは争ふべからざる事實」と認めている。「偶筆」（明治二十四年四月二十五日『國民新聞』）のなかで「彼等（当代の小説家＝引用者）超然として白雲の上にあるが如し、其見識極めて尊むべきに似たれど　惟白雲に圍繞せられて是が爲に眼は暗み心は迷ひて終に活社會を觀るを得ず」と批判して小説家に「實社會」へ眼を向けて「詩材」を獲得するよう提言し、また程なくして戯文『文學者となる法』（明治二十七年四月、右文社）を上梓して当代の文学者の実態を痛烈に風刺する通りである。但し「今日の小説及び小説家」には「我が小説界に若し一度瞋目電耀せば百獣懾伏する狻猊あるを信じて疑はず」との見解があり、「軟文學即ち小説に從事するもの何ぞ奮起して一面には紛々たる三文小説を蹴倒し一面には一派の硬文學連を瞠若せしめざる」という叱咤も窺える。魯庵は「硬文學」・「軟文學」なる区分に象徴される一連の批評を否定するとともに

に、当代の小説界が「沈滯して進歩の傾向より次第に遠かるの觀あるが如し」現実にも慷慨していたのである。かつて「文學極衰」論議において当代の文学を極衰と見做す意見を否定すると同時に、当代の未熟な人情主義小説の実体を批判したことと同様のスタンスと見做せる。

具体的に希求された「奮起」とは「審美上の價値」を判断基準とし、「確信せる大主旨」を構築することであった。また魯庵は「俗眼」即ち「世俗の嗜好」が未熟なことを訴え、「世俗の嗜好に媚ぶるが小説家の能事にあらず」と切り捨てる。要は「人氣」に阿る創作態度の否定であり、「既に『人氣』を念頭に置く時」は「世俗の奴隷」になり下がるともある。「今日の小説及び小説家」によると、当代の小説家のなかにも「技量」を有し、「社會人事に熟通し天命世運の玄機を悟得するもの」が存在するという。但し「『人氣』病に罹る」ために、未熟な「世俗」に「歡迎」され難い「審美上の價値」を有する小説を発表しないという。即ち「『人氣』の二字に束縛せらるゝ事」が真正の小説を生成する上で「大障礙」になっているという見解である。そこで魯庵は「小説家の責任」に言及し、小説家が「世俗を導き嗜好を長ぜしむるの任」を有すること、及び「著作」において「人間界の現象を直指して直接の感動を與へ以て世を警醒せしむる」だけでなく、「社會」において「眞摯敬虔」にして「師表に立つの志」を忘れてはならないことを明確にする。

このように「人氣」に阿る創作態度を否定することは処女批評「山田美妙大人の小説」（明治二十一年十月二十日、十一月三日『女學雑誌』）から一貫して示し続けてきた姿勢であり、小説家に「責任」を課して「師表に立つの志」を求めることは『文學一斑』のなかで文学者に「人類の師表」となるよう提言したことと一致する。従来の魯庵論を窺うと「人氣」に阿る創作態度の否定は、戯作者的な創作態度を否定する際に繰り返し唱えられてきた。「今日の小説及び小説家」でも「人氣」に阿る代表者として戯作者が挙げられ、

宜なる哉、此種の戯作者の筆に成りしもの多くは鄙俚猥雑なる事實を意味なく聯ね淫靡輕浮なる文字を巧に陳べしのみにして更に人生の秘密を描画し社會の眞相を發現せしものなきや。

と批判されている。また『文學一斑』との一致を考慮すれば、魯庵は「小説家の責任」に言及しつつ高尚で高潔な小説・小説家像を確立し、「硬文學」推進論者の所見を是正しようと試みたとも解釈できる。

おわりに

以上のように魯庵の主張は当代に蔓延する小説＝戯作、及び小説家＝戯作者という見解の否定を目途としていた。「現代文學」（全四回、明治二十四年十一月二十三日～明治二十五年一月三日『國民之友』）を鑑みると、「人氣」と「小説家の責任」とに関する主張は、背景に前時代の儒学的な文学観の排除が意識されていたと見做せる。つまり当代の小説家が「人氣」に阿ることも、「硬文學」推進論者が「小説戯曲詩歌等」を「遊戯文字」と括ることも、また一般の読者が「審美上の價値」を欠く小説を喜ぶことも、原因は根底において小説を戯作と同視し、経世済民の文章を「小説戯曲詩歌等」よりも高位に位置づける前時代の文学観にあるというのである。魯庵は高尚で高潔な小説家像の確立、及び「審美上の價値」を有する小説の生成を実現するため、「社會の實相を主觀的に描寫し以て人生の運命を説示する底の妙處」を希求するとともに根本的な意識改革も訴えたのである。魯庵が美学的な要素を満たした人生小説の構築と、前時代の戯作者意識から脱却した近代的な小説家像の確立という二点を批評の両軸としていたことが確認できよう。このように根本的な原因を前時代の文学観（旧思想）に求めた問題意識は後の社会批評・文明批評にも受け継がれており、魯庵批評の中核を成す論理の一つが提示されたとも見做せる。

註

(1)国会図書館所蔵の明治二十五年十月二十三日『國民新聞』は日曜附録が欠落しているため、本章では永渕朋枝『北村透谷「文学」・恋愛・キリスト教』（平成十四年八月、和泉書院）に復刻の「文話数則」を参照した。

(2)島田の発言は、巌本善治「文學極衰」（明治二十二年十二月十四、二十一日『女學雑誌』）のなかで紹介されている。

(3)矢野龍溪「浮城物語立案の始末」（全五回、明治二十三年六月二十八日～七月二日『國民新聞』）

(4)森鷗外「逍遙子の新作十二番中既發四番合評、梅花詞集評及梓神子（讀賣新聞）」（明治二十四年九月二十五日『しがらみ草紙』第二十四號「山房論文　其一」）

三浦大輔氏　学位請求論文要旨（課程博士）

「内田魯庵研究」

内田魯庵は明治二十一年に文芸批評家として文壇に登場し、後に小説家・翻訳家・社会批評家として活躍した人物である。また高い語学力と多大な読書量を活かして丸善の学術エッセー誌『學燈』の編集長に就任し、海外の著作や主義思潮を紹介することで日本の近代化に影響を与えた一人でもある。本論文では生い立ちから後期の社会・文明批評までを検証することにより、魯庵の多様な文筆業の全般を考察した。

第一章では文学界に登場するまでの魯庵の素養を見出すため、生い立ちと就学状況を調査した。魯庵は自筆回想が比較的多く、幼年・少年時代についての先行研究は自筆回想の引用に終始したものが多い。そこで学籍簿や当時の学校制度などの傍証資料を精査し、魯庵の回想を実証的に考察した。そして学校・年度ごとに大きな相違がある明治時代の教育内容を分析し、そこから導ける魯庵の修学の実体を明らかにした。

第二章では魯庵が文芸批評家としての活動を開始した『女學雑誌』時代（明治二十一年から二十二年）を考察した。この時代は日本近代文学の黎明期であり、従って文芸批評というジャンルも未成熟であった。そのため当時としては多くの西洋文学作品に触れていた魯庵だが、未だ自身のなかに確固たる文学理念を持たず、批評内容は混沌としていた。そのなかで魯庵は古今東西の文学論を研究し、次第に文章の華美・外形の雄大よりも作者の精神こそが創作の主体であるという批評原理を確立していく。本章では魯庵批評の変遷過程を分析し、魯庵の問題意識の在り処を見出すこととした。またその批評原理の背景にあった戯作者的創作態度への批判と、魯庵が推進する人生批評を主眼とした実際派小説との関係を考察した。

第三章では明治二十三年に魯庵が入社した『國民新聞』時代から、文学理論『文學一斑』（明治二十五年）までを考察した。この時期に魯庵は文芸批評家として最も精力的に活動しており、当時の日本文学界における主要課題の一つであった文学極衰論議でも中心的な役割を担った。この文学（主に小説）の本質に関する論議のなかで、魯庵は文学プロパーとしての立場から一貫して文学の存在意義を提唱した。その根幹には『女學雑誌』時代から論じ続けてきた作者の精神を創作の主体とする批評原理、及び文学と時代との相関関係を重視する文学観が見出せる。『文學一斑』はこの論議の最中に構想・執筆した体系的な文学理論書である。本章では魯庵の文学理論と同時代の他の文学者が著した文学理論との比較を、各々の文学者が準拠とした西洋の文学論の相違からも検証した。

第四章では動乱の影響が顕著な日清戦争前後（明治二十六年から三十年）の日本文学界での魯庵の立ち位置を考察した。維新以来初の大規模対外戦争となった日清戦の影響で文学界でも偏った愛国心を背景に日本独自の文学を称揚する「國民文學」論が盛んに唱えられた。井上哲次郎や徳富蘇峰、坪内逍遙など当代を代表する知識人たちがこぞって「國民文學」論を支持するなかで、魯庵は戦争による愛国心の高揚を「狂」と見做し、冷静に日本の文化レベルを捉えるべきと反駁した。また安直に戦争を題材とする作品も否定し、真にヒューマニティーを追及する作家を評価した。本章では当時の魯庵文に顕著な小説家・文学者論と実際の魯庵批評との内容を比較し、また翻訳した作品の意義なども加味し、時代の大転換期において魯庵が示した日本文学の方向性を検証した。さらに戯文『文學者となる法』を分析し、魯庵の批判の焦点が一向に進歩せず、益々「金錢」・「人氣」主義的創作に傾倒していく文壇の実態そのものに当てられていたことを導いた。また評伝『ジョンソン』を参考に、当時において魯庵が登場を期待した文学者像を考察した。

第五章では魯庵が主に小説家として活動した明治三十一年から三十四年を考察した。数ある作品のなかからデビュー小説「くれの廿八日」を分析し、従来の魯庵批評と実作との関係性を見出した。また先行研究において政治小説推進論とも否定論とも多様に解釈されてきた評論「政治小説を作るべき好時機」の真意を、密接な関連が見出せる魯庵初の作品集『文藝小品』との比較から改めて考察した。

第六章では先ず魯庵の丸善株式会社入社の経緯や時期の調査、及び編集に尽力した『學燈』の内容を精査した。次に明治四十年以後の魯庵の社会・文明批評を考察した。この時期に魯庵は総合雑誌『太陽』で連載を持ち、そこで時事問題に関する政治・経済・労働・戦争・教育・女性などの各問題を論じた。そして各問題の根幹に、日本における新旧思想の衝突を見出した。批評の背景には『女學雑誌』時代から一貫して思想と時代・社会との関連に注目し、また西洋の新思想を受容してきた魯庵の生き様が確認できる。そこで実際社会のなかでデモクラシーと封建主義とが如何に存在していたかを検証しつつ、魯庵批評の問題意識を考察した。